

ぶどうは生育に応じた適期管理を！
おうとう、うめ、あんずは適期収穫と収穫後防除の徹底を！！
もも、西洋なしは病害虫防除を万全に！！！！

I 要 約

- ぶどうは、摘心、摘房、摘粒等の管理作業を適期に行う。
- おうとう、うめ、あんずは、適期収穫と収穫後防除を徹底する。
- ももは、せん孔細菌病の夏型枝病斑を見つけ次第切り取り、被害果実も見つけ次第摘み取って適切に処分する。
- もも、西洋なしは、シンクイムシ類の防除を徹底する。
- 西洋なしは、輪紋病に最も感染しやすい時期なので、10日間隔の薬剤散布を厳守する。

II 特産果樹生産情報

1 生育概況

ぶどう「キャンベル・アーリー」の落花日は、五戸（りんご研究所県南果樹部）で平年より11日早かった。

おうとう「佐藤錦」の収穫は、南部町で平年より早い6月20日頃から始まった。

もも、西洋なしの果実肥大は、五戸で6月20日現在、平年を上回っている。

○ぶどうの生育ステージ

(6月18日現在)

品種	場所	年	発芽日	展葉日	開花日	満開日	落花日	ハウス被覆日	
スチューベン	五戸	本年	4.23	5.2	6.11	6.15		/	
		平年	4.29	5.13	6.22	6.24	7.2		
		前年	4.22	5.3	6.14	6.16	6.28		
	黒石	本年	4.22	4.30	6.9	6.11			/
		平年	4.29	5.9	6.17	6.19	6.29		
		前年	4.20	5.3	6.12	6.14	6.22		
キャンベル・アーリー (露地)	五戸	本年	4.20	4.30	6.8	6.11	6.15	/	
		平年	4.27	5.12	6.18	6.21	6.26		
		前年	4.16	4.29	6.9	6.12	6.18		
キャンベル・アーリー (無加温ハウス)	三戸	本年	4.5	4.18	5.16	5.18	5.21		3.20
		平年	4.4	4.15	5.14	5.17	5.21		3.17
		前年	4.3	4.12	-	-	-		3.16
シャインマスカット (簡易雨よけ)	五戸	本年	4.25	5.3	6.17			/	
		平年	4.30	5.12	6.27	6.29	7.3		
		前年	4.23	5.3	6.19	6.23	6.29		
シャインマスカット (露地)	黒石	本年	4.23	5.2	6.16	6.18			/
		平年	5.1	5.12	6.23	6.27	7.1		
		前年	4.21	5.3	6.19	6.22	6.27		

注1) 場所の五戸はりんご研究所県南果樹部、黒石はりんご研究所、三戸は三戸町梅内（県生育観測ほ）、以下同様

2) 平年値は2004～2023年（20年間）の平均。ただし、シャインマスカットの五戸の発芽日は2013～2023年（11年間）、展葉日は2012～2023年（12年間）、開花日、満開日、落花日は2011～2023年（13年間）、黒石は2009～2023年（15年間）の平均

3) キャンベル・アーリー（無加温ハウス）の前年値は開花日以降欠測

○もも、西洋なしの果実肥大

(6月20日現在、横径cm、%)

地域	樹種(品種)	本年	平年	前年	平年比
五戸 (県南果樹部)	もも(川中島白桃)	4.0	3.0	3.9	133
	西洋なし(ゼネラル・レクラク)	3.6	2.9	3.5	124

注1) 平年値：ももは2009～2023年（15年間）の平均、西洋なしは2004～2023年（20年間）の平均

2) ももの横径は縫合線を挟んだ最大径（側径）

2 作業の重点

(1) ぶどう（露地栽培）

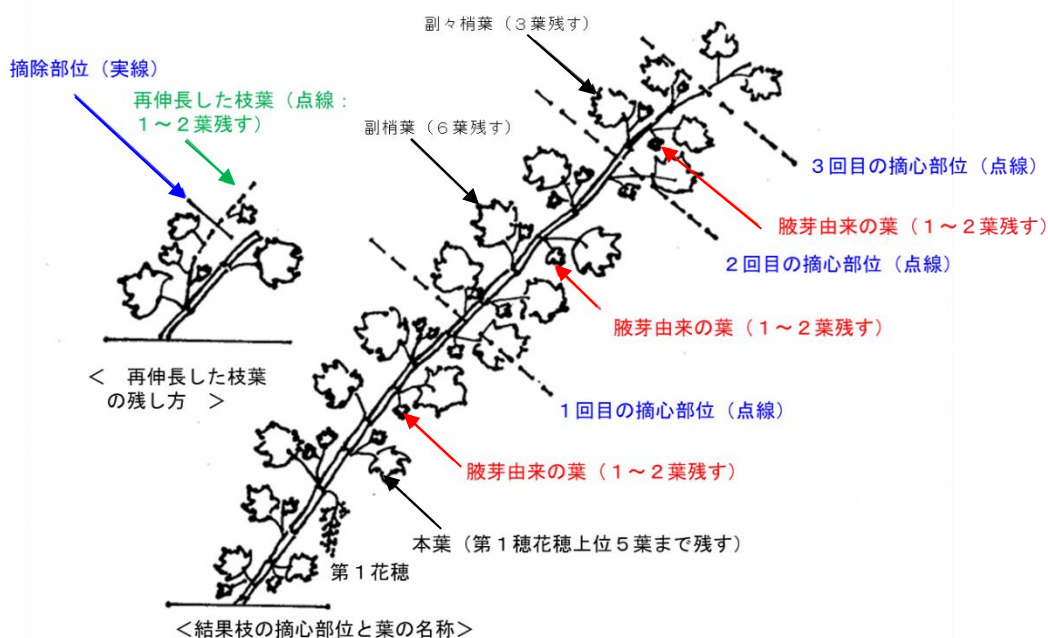
ア 新梢の誘引、結束

薬剤や日光の通りを良くするため、新梢は随時角度や間隔を調整しながら架線に誘引し、結束する。

イ 摘心（2回目）

副梢の展葉枚数が8～9枚になった頃に行う。1回目の摘心後に伸びた副梢を5～6枚残して摘心する。摘心部位の先端の副々梢だけを残して、他は全て摘除する。これ以降も副々梢が伸びる場合は3～5葉で摘心を行う。

ただし、シャインマスカットの脇芽由来の枝葉は、摘心時から摘心3日後頃に葉を1～2枚残し摘除する。



結果枝の摘心と葉の残し方（シャインマスカット）

注1）最終的に結果枝当たり概ね35～40葉残す。

2）結果枝は空枝2本程度を含めて主枝1m当たり12本程度とする。

ウ 無核処理（シャインマスカット）

無種子化を確実にするため、次の手順に従って処理を行う。

<手順>

① ストレプトマイシン処理

満開予定日14日前～開花始期にストレプトマイシン200ppm溶液を花房に散布または浸漬する。

② ジベレリン処理

満開時の処理は、写真のように花穂の先端まで開花したことを確認してから行う。

【ジベレリン2回処理の場合】

1回目は、満開時～満開3日後に、フルメット5ppmを加用したジベレリン25ppm溶液に花房浸漬する。

2回目は、満開10～15日後に、ジベレリン25ppm溶液に果房浸漬する。

【ジベレリン1回処理の場合】

満開3～5日後（落花期）に、フルメット10ppmを加用したジベレリン25ppm溶液に花房浸漬する。



シャインマスカットの満開時の花穂

エ 摘房

キャンベル・アーリーは花振るいが比較的多いので、果房の形が決まってから行う。キャンベル・アーリーなどの中粒種の着房数の目安は次のとおりである。

○生育が極端に劣る結果枝 : 原則としてすべて摘房

○生育がやや劣る結果枝 : 1果房

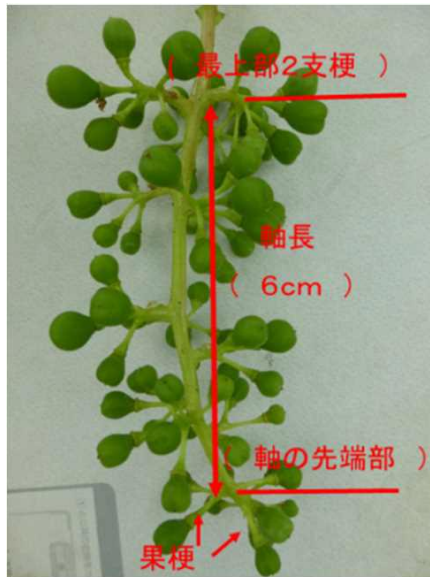
○中庸または旺盛な生育の結果枝 : 2果房

シャインマスカットなどの大粒種は、原則として1結果枝1果房とする。

オ 予備摘粒（シャインマスカット）

予備摘粒は、ジベレリン2回処理の場合に限り行う。1回目の処理日から5～7日後頃に、果房の軸長を6cmに調整する。その際、果房の内側（軸の方向）に向いた果粒を優先して摘粒し、小粒果や障害果も摘粒する。

なお、果粒軟化期前までに仕上げ摘粒を行い、着粒数は成木では40粒程度、若齢樹では40～50粒程度とする。

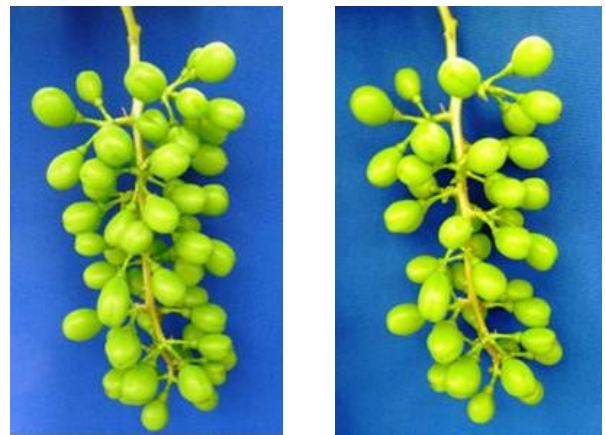


予備摘粒時の軸長の調整

カ 摘 粒

果粒の大きさが小豆粒大の頃（満開後15～25日）から始め、8月上旬頃（果粒軟化期前）には終わる。

品種別の摘粒の目安は下表のとおりである。小粒果やさび果などの障害果のほか、果粒が外向きに並ぶように内側に向けた果粒を除去し、目安の果粒数にする。



シャインマスカットの摘粒前後の果房
(左：摘粒前、右：摘粒後)

品種別目標果房重と果粒数（摘粒の目安）

品種	果房重 (g)	1粒重 (g)	果粒数 (粒)
スチューベン	300	4.0	70～80程度
キャンベル・アーリー	300	5.5	50～60程度
シャインマスカット	450～550	12～13	40程度

キ 袋かけ（シャインマスカット）

品質向上やかすり症の軽減対策として、果粒軟化期以降に袋かけを行う。袋かけは摘粒と病害虫防除の散布を済ませてから行い、袋は収穫時まではずさない。また、気温が30℃を超える極端な高温の日や時間帯は、日焼けを助長する場合があるので作業は行わない。

ク 追肥（地力の低い園地のみ）

地力の低い園地（砂礫質の沖積土壌や火山灰土壌）では、7月中旬（スチューベン
は7月上旬）の果粒肥大期に標準施用量の10%を施用する。施用量は成木（5年
生以降）で10 a 当たり窒素1.5kg、リン酸1.0kg、カリ1.0kgを目安として施用する。
施肥量は樹勢によって加減する。

ケ 病害虫防除

灰色かび病やべと病等の重要な防除時期なので、各病害虫に対する有効薬剤を選
択し、適期に適量の薬剤散布を行う。

（ア）薬剤散布（キャンベル・アーリー基準、スチューベン基準）

生育の進みが早く、「落花直後」以降の散布間隔があき過ぎる場合は、適正な
間隔とするために、「大豆粒大（7月中旬頃）」を「大豆粒大」と「7月中旬」の
2回に分けて薬剤散布を行う（追加散布）。なお、薬剤の年間使用回数には十分
注意する。

キャンベル・アーリー基準、スチューベン基準（通常散布：散布間隔があかない場合）

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
落花直後	ロフラル水和剤 1,500倍 又はホリバリン水和剤 1,000倍 又はスイッチ顆粒水和剤 2,000倍 又はフルビカロアブル 2,000倍	アグロリン水和剤 2,000倍 又はアデイオンアブル 1,500倍 又はジメフラン剤 2,000倍	2500
大豆粒大 (7月中旬頃)	ジマンダセン水和剤 1,000倍 又はアミスター-10アブル 1,000倍 又はストビートライアブル 2,000倍 又はホイズントライアブル 2,500倍	アグロリン水和剤 2,000倍 又はアデイオンアブル 1,500倍 又はヨバルアブル 5,000倍 又はテッパン液剤 2,000倍 又はスピノシン剤 10,000倍	2500
8月上旬	(キャンベル・アーリー) ストビートライアブル 2,000倍 又はホイズントライアブル 2,500倍 (スチューベン) アミスター-10アブル 1,000倍 又はストビートライアブル 2,000倍 又はホイズントライアブル 2,500倍	—	2500

キャンベル・アーリー基準、スチューベン基準 (追加散布：散布間隔があく場合)

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
落花直後	ロブラール水和剤 1,500倍 又はホリバリリン水和剤 1,000倍 又はスイッチ顆粒水和剤 2,000倍 又はフルビカフロアブル 2,000倍	アグロリン水和剤 2,000倍 又はアデイオンフロアブル 1,500倍 又はジノテフラン剤 2,000倍	2500
大豆粒大	ジマンダイセン水和剤 1,000倍	ジノテフラン剤 2,000倍	2500
7月中旬	アミスター10フロアブル 1,000倍 又はストロビドライフフロアブル 2,000倍 又はホライズンドライフフロアブル 2,500倍	アグロリン水和剤 2,000倍 又はアデイオンフロアブル 1,500倍 又はヨバルフロアブル 5,000倍 又はテッパン液剤 2,000倍 又はスピノシン剤 10,000倍	2500
8月上旬	(キャンベル・アーリー) ストロビドライフフロアブル 2,000倍 又はホライズンドライフフロアブル 2,500倍 (スチューベン) アミスター10フロアブル 1,000倍 又はストロビドライフフロアブル 2,000倍 又はホライズンドライフフロアブル 2,500倍	—	2500

注1) ジノテフラン剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

2) スピノシン剤：ディアナWDG、デリゲートWDG

3) 「大豆粒大」以降、展着剤は使用しない。

4) ジマンダイセン水和剤は散布時期が遅れると果面汚染の懸念があるので、「大豆粒大」までに散布する。

5) ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブルとストロビドライフフロアブル及び同じ系統の混合剤であるホライズンドライフフロアブルは、薬剤耐性発達の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は年1回以内の使用とする。

(イ) 薬剤散布 (シャインマスカット基準)

シャインマスカット基準

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
落花直後	ロブラール水和剤 1,500倍 又はホリバリリン水和剤 1,000倍 又はスイッチ顆粒水和剤 2,000倍 又はフルビカフロアブル 2,000倍	アグロリン水和剤 2,000倍 又はアデイオンフロアブル 1,500倍 又はジノテフラン剤 2,000倍	2500
大豆粒大 (7月中旬頃)	アミスター10フロアブル 1,000倍 又はストロビドライフフロアブル 2,000倍 又はホライズンドライフフロアブル 2,500倍	アグロリン水和剤 2,000倍 又はアデイオンフロアブル 1,500倍 又はヨバルフロアブル 5,000倍 又はテッパン液剤 2,000倍	2500

8月上旬	アミスター10フロアブル 1,000倍 又はストロビートドライフロアブル 2,000倍 又はホライズントドライフロアブル 2,500倍	—	2500
------	---	---	------

注1) ジノテフラン剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

2) 大豆粒大（7月中旬頃）以降、展着剤は使用しない。

3) ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブルとストロビードライフロアブル及び同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性発達の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は年1回以内の使用とする。

(ウ) 灰色かび病対策

新梢の摘心や誘引を適切に行い、園地内の風通しを良くする。発病葉、発病果及び発病枝はできるだけ早く取り除き、土中に埋めるなどの処分をし、他へ伝染しないようにする。

長期貯蔵向けのシャインマスカットでは、袋かけ前（7月下旬～8月上旬）にフルーツセイバー1,500倍を特別散布する。フルーツセイバーは薬剤耐性発達の懸念があるので、年1回の使用にとどめる。袋かけは薬液が乾いてから行う。

(エ) 晩腐病対策

発病果粒や発病果房は見つけ次第摘み取って、適切に処分する。園地内の排水や風通しを良くし、過湿にならないようにする。

「落花直後」にポリベリン水和剤又はスイッチ顆粒水和剤を選択する。また、スチューベンで発生が多い園地では、「小豆粒大」にベンレート水和剤3,000倍を特別散布する。

(オ) ベと病対策（スチューベン、シャインマスカット）

軟弱な生育を避けるために、生育が旺盛な園地では追肥を控えるなど、窒素肥料を施用し過ぎない。発病葉や発病果房は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

排水不良園では、排水溝を掘って、雨水が長く溜まらないようにする。

発生が多い園地では、「落花直後」にランマンフロアブル2,000倍又はライメイフロアブル4,000倍も使用する。ただし、ランマンフロアブルはポリベリン水和剤と組み合わせない（物理性の悪化）。

(カ) チャノキイロアザミウマ対策（シャインマスカット）

発生が懸念される園地では、「大豆粒大（7月中旬頃）」以降、袋かけ前まで以下の薬剤を10日間隔で散布する。薬剤散布後、薬液が乾いてから速やかに袋かけを行う。

チャノキイロアザミウマ対策の特別散布（袋かけ前）

散布時期	殺虫剤	
7月下旬	アグロスリン水和剤	2,000倍
	又はアディオフロアブル	1,500倍
	又はヨーバルフロアブル	5,000倍
	又はテッパン液剤	2,000倍
8月上旬	スピノシン剤	10,000倍
8月中旬	スピノシン剤	10,000倍

注) スピノシン剤：ディアナWDG、デリゲートWDG

(キ) コガネムシ類対策

成虫は見つけ次第捕殺する。

落花直後に発生が多い園地では、アグロスリン水和剤又はアディオフロアブルを選択する。

キャンベル・アーリー、スチューベンで、「大豆粒大（7月中旬頃）」に発生が見られる場合は、アグロスリン水和剤、アディオフロアブル、ヨーバルフロアブル、テッパン液剤のいずれかを選択する。

「7月下旬」に発生が見られる場合は、アグロスリン水和剤2,000倍、アディオフロアブル1,500倍、スミチオン水和剤40の800倍、ヨーバルフロアブル5,000倍、テッパン液剤2,000倍のいずれかを特別散布する。

(2) ぶどう（無加温ハウス）

ア ハウス内の温度管理

外気温が30℃を超える日は光合成能力が著しく低下し、果実の日焼けなど高温障害の発生が懸念されるので、ハウスのサイド、妻及び屋根の谷間を巻き上げるなどして換気する。

イ 袋かけ（シャインマスカット）

露地栽培に準ずる。

ウ 収穫

収穫は品種特有の着色を示し、芳香を放ち、食味も良くなり固有の風味に達してから行う。収穫時の糖度は、キャンベル・アーリーでは14%を目安とする。

キャンベル・アーリーは着色が良いため、低糖度の果房や未熟果が収穫されがちなので、果皮色が紫黒色となり、果粉に覆われ品種固有の食味に達してから収穫する。

(3) おうとう

ア 収穫

収穫はなるべく朝や夕方の涼しい時間帯に行う。日中の高温時に収穫する時は、収穫後直ちに冷涼な日陰に置き、果実温度を下げ、鮮度を保つ。やむを得ず降雨中に収穫した場合は、扇風機などを利用して果実を乾燥させてから出荷する。

収穫が遅れるとオウトウショウジョウバエの発生やうるみ果になりやすいので、適期収穫に努めるとともに被害果は除去する。

収穫に当たっては、食味や着色程度を確認するなど総合的に判断する。

ジュノハートは、「満開55日後頃（五戸で6月20日頃）」を収穫始めの目安とし、「満開60日後頃」以降は、専用カラーチャートの着色指数4以上の果実を収穫する。

着色指数6に達した果実は、過熟で日持ちが著しく劣り、流通には不向きなので即売用等に仕向ける。専用カラーチャートにより果皮色を判定する際は、着色が中庸な部分で行い、直射日光を避けて明るい日陰で比色する。

イ 雨よけ被覆資材の除去

収穫が終わったら、できるだけ早く被覆資材を除去する。

ウ 追肥（礼肥）

収穫後（7月中旬頃）に標準施肥量の20%を施用する。施用量は成木（11年生以降）で10a当たり窒素3.0kg、リン酸1.2kg、カリ2.4kgを目安とする。施肥量は土壌条件や樹勢によって加減する。

エ 病虫害防除

灰星病や炭疽病、オウトウショウジョウバエ等の重要な防除時期なので、各病虫害に対する有効薬剤を選択し、遅れないよう適期に薬剤散布を行う。

（ア）薬剤散布

散布時期	殺菌剤		殺虫剤		散布量 /10a
収穫前 （晩生種）	アミスター10フロアブル	1,000倍	スカウトフロアブル	3,000倍	500ℓ
	又はナリアWDG	2,000倍	又はテルスターフロアブル	4,000倍	
			又はエクシールSE	2,500倍	
			又はテッパン液剤	2,000倍	
			又はスピノシン剤	10,000倍	
収穫後	ホソサト [®] 水和剤80	800倍	—	500ℓ	
	又はオキシ [®] 水和剤	600倍			
	又はチウラム剤	500倍			

注1) スピノシン剤：ディアナWDG、デリゲートWDG

2) チウラム剤：チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル

3) ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブルとファンタジスタ顆粒水和剤及び同じ系統の混合剤であるナリアWDGは、薬剤耐性発達の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は連続使用しない。

(イ) 灰星病対策

実腐れは見つけ次第摘み取って、適切に処分する。

(ウ) 褐色せん孔病対策

多発すると早期に落葉するので、「収穫後」の薬剤散布を速やかに行う。

(エ) オウトウショウジョウバエ対策

被害果は速やかに処分し、密度の低下を図る。樹上の取り残し果実も、摘み取って処分する。

(オ) カメムシ類対策

断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊を見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫が見られたら、分散する前に捕殺する。

「収穫前（晩生種）」に発生が見られた場合、テルスターフロアブルを選択する。ただし、この時期にオウトウショウジョウバエ対策でスカウトフロアブルを使用すると、防除剤は必要ない。

(4) も も

ア 見直し摘果

硬核期には摘果を避け、7月上旬頃（満開70日後頃）から見直し摘果を行う。

イ 新梢整理

樹冠内部を明るく保つため、太枝の背面や先端部から伸びた徒長枝は除去する。日焼け対策として残す場合は、5～10cm程度の長さで、葉芽を残して切り取る。

ウ 除袋

除袋の適期は概ね収穫の10～14日前頃である。果実が品種本来の大きさになり、果皮が全体的に白みがかかり、地色が5～6割抜けた（果梗部と縫合線周辺に青みが残る）頃を目安とする。天候不順が予想される場合は2～3日早める。

除袋後は果実に直接覆いかぶさっている葉を摘み取る。

エ 着色管理

十分な新梢管理や支柱立て、枝吊りなどを行ってから、果実に触れている葉を数枚摘み取る。摘み取り過ぎると、外観や品質の低下を招くので注意する。

反射資材を敷くと、樹冠内の光環境が改善され、着色向上に役立つが、着色が先行するため、未熟果を収穫することのないよう、収穫適期の見極めには十分注意する。

オ 病虫害防除

(ア) 薬剤散布

生育の進みが早く、概ね10日間隔での防除が困難な園地では、例年の「落花40日後頃」と「7月上旬」の間に「落花50日後頃」の散布を追加する。なお、薬剤の年間使用回数には十分注意する。

散布時期	殺菌剤		殺虫剤		散布量 /10 a
<u>落花50日後頃（追加散布）</u>	マイコシールド	2,000倍	サイヤックス水和剤	1,000倍	400ℓ
	+ ダコニール1000	1,000倍			
7月上旬	デランフロアブル	600倍	サイヤックス水和剤	1,000倍	400ℓ
	又はダコニール1000	1,000倍	又はバ イロト`EW	2,000倍	
	又はバルクトフロアブル	2,000倍	又はイカズチWDG	1,500倍	
7月中旬	デランフロアブル	600倍	ジノテフラン剤	2,000倍	400ℓ
	又はダコニール1000	1,000倍	又はエクシレルSE	5,000倍	
			又はサムコフロアブル10	5,000倍	
7月下旬	ダコニール1000	1,000倍	ダイジノ水和剤34	1,000倍	400ℓ
	又はバルクトフロアブル	2,000倍	又はモス`ン顆粒水溶剤	4,000倍	
			又はダントツ水溶剤	2,000倍	
			又はエクシレルSE	5,000倍	
			又はサムコフロアブル10	5,000倍	
8月上旬	バルクトフロアブル	2,000倍	ダイジノ水和剤34	1,000倍	400ℓ
	又はストビ`ト`ライフロアブル	2,000倍	又はダントツ水溶剤	2,000倍	
	又はナリアWDG	2,000倍	又はジノテフラン剤	2,000倍	
			又はテルスターフロアブル	3,000倍	
			又はスカトフロアブル	2,000倍	

注1) ジノテフラン剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

2) 「落花40日後頃」までのスターナ水和剤の使用回数が2回以内で、かつ「落花40日後頃」にスターナ水和剤を使用していない場合、「落花50日後頃」は、マイコシールドに代えてスターナ水和剤（年間使用回数：3回以内）を使用できる。

(イ) せん孔細菌病対策

薬剤散布と耕種的防除を組み合わせた総合的防除を徹底する。なお、風を強く受ける地帯で多発するので、防風対策は必ず行う。

一次伝染源である春型枝病斑の切除を徹底する。6～8月に新梢に発生する夏型枝病斑は重要な伝染源になるので、見つけ次第切り取り、適切に処分する。被害果実も見つけ次第摘み取って適切に処分する。

前年に果実被害が多かった園地では、果実感染を防ぐため有袋栽培とする。



せん孔細菌病夏型枝病斑

発生が多い園地では、「7月上旬」及び「7月中旬」にデランフロアブルを選択する。

(ウ) シンクイムシ類対策

幼虫が果実から脱出する前に被害果を採取し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。被害果をそのまま放置すると次世代の発生源となるので、必ず処分する。

ナシヒメシンクイの加害による新梢の芯折れは見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

(エ) カメムシ類対策

断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫が見られたら、分散する前に捕殺する。

発生が見られる園地では、基準薬剤の中から「7月上旬」はイカズチWDG、「7月中旬」はジノテフラン剤、「7月下旬」はダントツ水溶剤、「8月上旬」はダントツ水溶剤、ジノテフラン剤、テルスターフロアブルのいずれかを選択する。

(5) なし

ア 徒長枝の整理

将来、結実枝として使用するもの以外は、枝の基部から除去する。徒長枝を切る際には高切りせずに、枝の基部からきれいに切り取る。

イ 病虫害防除

(ア) 薬剤散布（西洋なし）

生育の進みが早く、概ね10日間隔での防除が困難な園地では、例年の「落花40日後頃」と「7月上旬」の間に「落花50日後頃」の散布を追加する。なお、薬剤の年間使用回数には十分注意する。

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
<u>落花50日後頃（追加散布）</u>	ベルコート水和剤 1,000倍	スカウトフロアブル 2,000倍	450ℓ
7月上旬	ストロートドライフロアブル 2,000倍 又はナリアWDG 2,000倍 (又はベルコート水和剤 1,000倍) ※ 注2) 参照	ダイジン水和剤34 1,000倍	450ℓ
7月中旬	オキシラン水和剤 500倍 又はキャプレート水和剤 600倍	テルスター水和剤 1,000倍 又はダイジン水和剤34 1,000倍	450ℓ

7月下旬	ストロビードライフフロアブル	2,000倍	スカウトフロアブル	2,000倍	4500
	又はナリアWDG	2,000倍			
	又はベルコート水和剤	1,000倍			
8月上旬	オキシラン水和剤	500倍	スカウトフロアブル	2,000倍	4500
	又はベルコート水和剤	1,000倍	又はダイゼン水和剤34	1,000倍	

注1) ストロビルリン単剤のストロビードライフフロアブル及び同じ系統の混合剤であるナリアWDGは、薬剤耐性発達の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。

2) イミノクタジンを含む農薬（ベルコート水和剤、ベフキノン水和剤）の年間総使用回数は「5回以内」である。「落花50日後頃」の追加散布を行った場合は、基準を超えないようにするため「7月上旬」にベルコート水和剤は使用しない。

3) 「7月下旬」以降、プレコースやゼネラル・レクラークなどの早・中生種に散布する場合、収穫前日数に注意して薬剤を選択する。

(イ) 輪紋病対策

6～7月の幼果期は輪紋病に最も感染しやすいので、10日間隔で薬剤散布を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、事前散布する。

(ウ) カメムシ類対策

断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊を見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫が見られたら、分散する前に捕殺する。

7月上旬に発生が見られた場合は、スタークル顆粒水溶剤2,000倍又はアルバリン顆粒水溶剤2,000倍を特別散布する。

「7月中旬」に発生が見られたときは、テルスター水和剤を選択する。

「7月下旬」及び「8月上旬」に発生が見られたときは、スカウトフロアブルを1,500倍で使用する。

(エ) シンクイムシ類対策

幼虫が果実から脱出する前に被害果を採取し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。被害果をそのまま放置すると次世代の発生源となるので、必ず処分する。

(6) うめ・あんず

ア 収穫

(ア) うめ

梅漬け用は果面の地色がわずかに抜けて、やや白みを帯びた頃である。梅酒用はこれより2～3日早めのまだ青いうちに収穫する。

(イ) あんず

果梗部の色が薄れて黄色に変わり始めた頃（果実がまだ軟らかくならないうちに）が適期である。また、収穫適期の期間が短いので、適期を逃さず、速やかに収穫を行う。

イ 追肥（礼肥）

収穫後に標準施肥量の20%を施用する。施用量は成木（9年生以降）で10a当たり窒素2.8kg、リン酸1.2kg、カリ2.0kgを目安として施用する。施用量は土壤条件や樹勢によって加減する。

ウ 病害虫防除

（ア）薬剤散布

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 ／10a
収穫後 （7月中～下旬）	トップジンM水和剤 1,500倍 又はストロベートドライアブル 2,000倍 又はロブラール水和剤 1,500倍	—	350ℓ

（イ）灰星病対策

あんずでは灰星病が発生しやすいので、収穫前にオーシャイン水和剤3,000倍を特別散布する。

（ウ）環紋葉枯病対策

発生すると早期落葉するので、「収穫後」の薬剤散布は速やかに行う。

（7）核果類共通（おうとう、もも、うめ、あんず、すもも、ネクタリン）

ア コスカシバ対策

生育期に枝幹部や地際部に樹脂（ヤニ）又は虫糞の発生が見られる場合は、削り取って幼虫を捕殺あるいは刺殺する。もしくは、虫糞を取り除き、ロビンフッドのノズルを孔に差し込み、薬液を噴射する。

青森県農薬危害防止運動展開中（6月～8月）！

《 農薬使用基準の遵守 ポジティブリスト制への対応 》

農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認する。

農林水産省「農薬登録情報提供システム」 (<https://pesticide.maff.go.jp/>)

農薬の使用にあたっては、事前に周辺住民に対し、農薬の散布日時や使用者の連絡先等を十分な時間的余裕を持って知らせる。また、農薬の飛散により、周辺作物や近隣の住宅等に被害を及ぼすことのないように農薬飛散低減対策に留意して散布する。

《 熱中症予防運動展開中！（6月～8月） 》

熱中症による緊急搬送者が近年増加傾向にあります。こまめな休憩をとり、水分・塩分補給を行い、熱中症を予防しましょう。

詳しくは、こちらをご覧ください。

・熱中症予防運動 (<https://www.nounavi-aomori.jp/farmer/archives/8811>)



《 りんご属及びなし属植物の中国産花粉を使用しないで！ 》

中国において、火傷病の発生が確認されたため、中国産なし、りんごの花粉等の輸入が停止されました。

既に輸入された中国産花粉を介して火傷病がまん延することがないように、生産年にかかわらず、中国産花粉や来歴不明の花粉を入手・使用することがないようにお願いします。

《 青森県総合防除計画 》

総合防除とは、有害動植物の発生及び増加の抑制並びにこれが発生した場合における駆除及びまん延の防止を適時経済的に講ずることです。

青森県総合防除計画では、農業者が遵守すべき事項（「遵守事項」）の対象として、りんご「モモシクイガ」を設定しているため、適切な防除に努めましょう。

※県は、モモシクイガの防除が適正に行われるように、指導及び助言、勧告、命令を行うことができ、命令に従わない農業者は、30万円以下の過料に処されます。

○りんご「モモシクイガ」の遵守事項（一部要約）

（1）予防に関する措置

被害果は必ず処分するとともに、交信攪乱剤の設置や袋かけを行う

（2）判断、防除に関する措置

被害果は見つけ次第摘み取り処分するほか、薬剤散布による定期防除を行う

詳しくはこちらをご覧ください。

・青森県総合防除計画 (<https://www.nounavi-aomori.jp/farmer/archives/8140>)



農業保険に加入し、農業経営に万全の備えを！

次回の「特産果樹生産情報」第5号は8月1日（木）発表の予定です。

連絡先：りんご果樹課生産振興グループ
電話番号：017-722-1111代表
内線5148、5149
017-734-9492直通